

## 異文化における育児の苦境

東京学芸大学大学院児童学研究専攻

何 星雨

「刮痧」(監督:鄭曉龍, 2001年上映)という意味深い中国映画がある。「刮痧(かっさ)」とは、専用の板で背中をこすって皮膚を充血させ、様々な病気の症状を改善する伝統的な中医療法である。映画では、アメリカで暮らしている中国人三世代家族の子育てを取り巻く異文化間葛藤を描写している。主人公は人前でも息子を厳しくしつけるべきだという文化信念を持ち実践していた。そして、主人公の父親は、ある日熱が出ている5歳の孫(主人公の息子)に「刮痧」の治療法を行った。後に息子の背中にある大面積の傷を医者に発見され、深刻な虐待の証拠として警察に通告された。その上、日常的な体罰を行っていたこともアメリカ人の知人に指摘され、主人公一家は強制的に親子分離を要求されることになった。中国文化に根差した親子観念、育児様式と西洋の人権観念、社会制度との間の矛盾は、その後親権をめぐる主人公と児童福祉施設との裁判現場において露呈している。

そうした現実でも生じ得る葛藤が近年の日本社会でも課題になるのはおかしなことではない。私はこれまで7年間日本と中国の児童虐待について研究している。儒家文化に根差した親子観念は類似していたが、社会制度の変化とともに、現在の日本と中国では「児童虐待」への扱いがすでに異なってきている。中国では、親による子どもへの体罰が一般的な事象であり、極端な暴行を与えない限り、「良い家庭教育の方法」として認められると言っても過言ではない。日本では、2000年に『児童虐待防止法』が制定されて以来、児童虐待となる行動の範囲がどんどん拡大されており、身体的・心理的な暴力やネグレクトを含めた不適切な養育が児童虐待として非難されている。また、虐待の疑いがあることに気づいたら、保育士や教師、小児科医など子どもに身近に関わる人だけでなく全国民が通告する義務を課せられた。

一方、周知の通り、日本では、家族形態が多文化化・多民族化の様相を呈している。法務省によると2023年6月時点で日本に中長期滞在している中国人は82万人を超え、国別1位となっている。中国にルーツを持つ未成年の子どもも最多である。家庭において中国の伝統文化に触れながら育てられている子どもが日本において非常に多いということである。しかし「児童虐待」への扱いや認識の差異は、家庭という閉鎖的空間において育児実践を通して具現化される時があり、中国人親にとって育児実践の壁となっており、また、日本社会での児童虐待防止に支障をきたすものと考えられている。

日本に在住している知人の中国人母親による出来事がきっかけで、異文化の育児がもたらした虐待防止の課題を垣間見ることができた。この母親は、子どもをしつけようと思い、つい2歳の子どもに体罰的な行動を行った。隣人が子どもの泣き声を聞いたか、もしくは保育園の先生が子どもの体の傷に気づいたか、自宅で児童相談所の職員と警察から児童虐待の事情調査をうけることになった。その母親はとてもショックを受け、混乱して「自分の子どもを虐待するわけがないのに」と大泣きしながら訴えたと言う。

こうした事例はめずらしくない。自分の生活経験を投稿できる「小紅書」という中国の人気ソーシャル

メディアアプリがある。そこでは、類似した経験を訴えた日本在住の中国人母親による投稿が多数ある。「親として自分の子どもをしつけるのはダメですか?」「育児は他人と関係ないのに通告されるのはなぜ?」など、日本の「児童虐待」への扱いや制度に対して困惑を感じているようである。これらの母親を責めるつもりはない。彼女たちの中には日本語を知らない者もあり、日本語を知っていても日本の児童虐待に関する情報を知ることが難しい。ただ「これまでの文化信念=ちゃんとしつけようと思ったのに」vs「現代日本の法制度=虐待者として疑われ、調査された」の苦境に立ち、「どう育児すれば良いのか?」に関する的確な援助を必要とする。この苦境が今後の育児ストレスに繋がり、より深刻な虐待に至る可能性があるからである。

今日日本の児童虐待の早期予防に関する主な取組みは、日本人の虐待リスクを基準に成り立ったものであり、虐待のリスクを踏まえながら、母子保健や啓発活動などを通して子育て中の親を支援することが基本である。しかし育児中の親の持つ文化背景がどんどん多様化している中、虐待の早期予防に向かうリスクアセスメントに画一的な判定を使用しているのは適切ではないと考えている。さらに不思議に思うのは、多く存在している在日中国人親には、「児童虐待」の疑いといった子どもの権利に関する緊急性の高い課題を抱えているのに、日本の福祉制度や支援体制の情報を入手しにくいため、援助を受けられないことや、文化背景を配慮した育児に関する的確な援助がそもそも提供されていないことである。私は、今後虐待予防の視点から在日中国人親の子育てを支援していけたらと考えている。